

サトイモの優良種いも増殖に湛水畝立て栽培法は有効

畝間に6月から3か月程度水を流しながら湛水栽培することにより2割程度増収し、優良種いもが生産できる

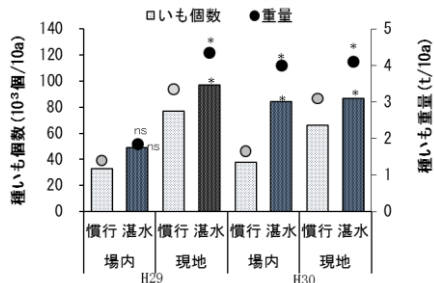
背景・目的

- ・サトイモの加工・業務用冷凍品に対して安心・安全な国産への要望があるものの、優良種いもの不足により生産拡大への対応が困難
- ・近年開発されたサトイモ湛水栽培法は光合成速度の高まりにより、いも個数の増加が期待
- ・本栽培法による優良種いも増収技術の確立を目指す

成果の内容

湛水畝立て栽培法は、畝間1mで畝立て黒マルチし、3～4月に株間20～30cmで植付け、本葉が5枚以上展開した6月から3か月程度畝間に水を流しながら湛水

湛水後2週間目（現地：霧島市横川）



規格内の種いも個数、重量が2割程度増加
(石川早生丸: 20～80g)

乾腐病、線虫等の病害や裂開症、芽つぶれ症等の障害いもの発生割合も軽減 (%)

試験区	病害	裂開	芽つぶれ	その他	計	
H29	慣行	6	7	4	31	48
	湛水	0	4	-	27	31
H30	慣行	3	10	3	30	46
	湛水	-	1	-	12	13

注1) 試験は鹿児島県農総センター

2) 病害は乾腐病、線虫害等を、その他は変形、セミいも等を示す

畝間へかけ流すことが重要

※栽培様式

- ・畝間1mで畝立て黒マルチし、3～4月に株間20～30cmで植付ける

※施肥

- ・10a当たり牛ふん堆肥2t/10a、窒素: 15kg (LP70日タイプ70%, 速効性30%), リン酸: 15kg, カリ: 15kgを基肥施用

導入メリット

湛水2か月目の生育状況

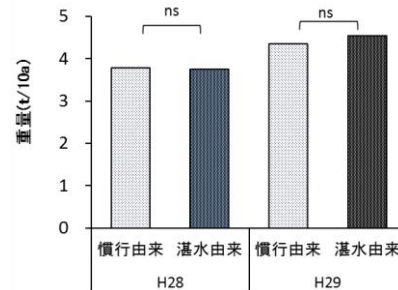


用水路から水入れするだけで低コスト

収穫時のいも着生状況



干ばつ等の気象災害を受けにくく、収量、品質が安定



本栽培法で生産された種いもは、慣行栽培由来の種いもと同等の収量が得られ、種いもとして利用可能

期待される効果

本栽培法の種いも生産により、種いも収量が20%向上し、障害いもも軽減されることから、農業所得の向上の見込

普及対象・範囲
サトイモ種いも生産農家